

『情熱の終着点』

著：華藤えれな

ill：三雲アズ

諏訪を拾って、佐多家組に迎え入れた当人である古賀は、何かと諏訪のことを気にかけてくれていた。

「ありがとうございます。経営も嫌いじゃありませんが、荒事がある時はいつでも遠慮なく呼んでください」

「ああ、期待してる」

そのままの状態、暫く武藤と一緒に古賀と立ち話をしていた諏訪だったが、若頭補佐の小田島が、彼が初めて見る美しい青年を伴って古賀を呼びに来たので話を中断した。

（とてもヤクザ者には見えないから、傘下の店のホストだろうか？ でも……いや、ホストにも見えないな……）

まず服装が、ホストにしては品があっておとなしい。

麻のオフホワイトのスーツに、抑えた色合いのピンストライプのネクタイをしている。

サラリーマンにも見えなかったが、ホストやモデルにしては派手さに欠けるようだった。

何よりも、その手の仕事の人間だとしたら、あまりにもまとう空気が清浄すぎる。

伏目がちに佇(たたず)んでいる青年の白い横顔に、諏訪の視線は知らず釘付けになっていた。

「若頭、お車の用意ができました」

相変わらず愛想のない顔で、小田島は古賀へ向かって頭を下げた。

「ああ、わかった」

「約束の時間が迫っていますので、お急ぎください」

大柄な小田島の背中に隠れるようにして佇んでいた青年も、小田島が頭を下げるのに倣(なら)うようにして優雅な仕草で頭を下げる。

しかし、それにしても見れば見るほど、綺麗な容姿の青年だった。

つい物珍しさも手伝って、無意識に凝視していたらしく、諏訪の視線に気づいたらしい青年が、ふと顔を上げた。

瞬間、諏訪と青年の視線が絡まった。

（あ、れ……？）

青年の琥(こ)珀(はく)色(いろ)の綺麗な瞳が、諏訪と目が合った途端に大きく見開かれた。

見知らぬチンピラと目が合ったことに驚いたというよりも、明らかに諏訪がこの場ににいることに驚いたような反応だった。

（もしや、どこかで会ったことがあっただろうか……？）

実を言えば、諏訪も青年の顔を正面から見た瞬間に、妙な既視感のようなものを感じていた。

もしかすると、以前にも佐多家組のシマの周辺で、擦れ違ったことくらいはあったの

かもしれない……。

だがそれなら、諏訪はともかくとして、件の美青年の反応は妙な気がした。

「それじゃあ、またな。次は仕事場の方にも寄らせてもらうよ」

「はい、お待ちしております」

武藤が嬉しそうに古賀に頭を下げるのを見て、諏訪も無言で頭を下げる。

今さらではあったが、武藤もなんだかんだ言って古賀のことを慕っているようだった。

頭を下げていても、小田島の背後に佇んでいる美青年が、自分のことをソッと窺(うかが)っている気配を感じたが、諏訪はそれにはあえて気づかない振りをした。

彼がどんな立場の人間なのかわからない限り、古賀や小田島の前で不(ふ)躰(しつけ)に相手を見るような真似は得策ではないと、ほとんど本能的に諏訪は察していたからだった。

諏訪は結局、事務所ビルの外に出て、武藤と並んで古賀たちが乗った車が視界から消えるまで見送った。

そして、車が見えなくなると、ついに我慢できずに武藤に向かって、先ほど小田島が伴っていた美青年のことを訊ねたのだった。

「武藤さん、さっき小田島の兄貴と一緒にいた、あの……やたら綺麗な顔をした人は誰なんですか……？」

諏訪の問いに、武藤はすぐに合点がいったらしく、「ああ、彼ね……」と少しだけ困ったような口調で呟(つぶや)いた。

「そうか、諏訪くんは『アンジェ』と会うのは初めてだったっけ？」

「アンジェ……天使、ですか？」

普通の男に『アンジェ』なんて愛称がついていたら、諏訪は間違いなく笑い飛ばしていただろう。

しかし、あの中性的で美しい容姿には、確かに天使の愛称は似合いかもしれなかった。

(まさか、男相手に『美しい』とか、『綺麗』だとか形容することになるとは、さすがに俺も思っていなかったな)

バーテンダーの仕事をしている時に、美しく着飾った夜の蝶(ちょう)のような女たちの姿を何度も見たが、諏訪は彼女たちを本当の意味で『綺麗』だと思ったことは一度もなかった。

寡黙で精悍な容姿で、年齢不相応に落ち着いて見える諏訪は、玄(くろ)人(うと)女性からは随分と受けがよかったのだが、諏訪が彼女たちの秋波に靡(なび)くことは一度もなかった。

しよせんは、巧みな化粧で武装したフェイクだと思えば、どんなに美しく着飾った女を見ても、興味を抱くことができなかったからだった。

これまでに諏訪が付き合ってきた女性たちは、ナチュラルメイクの知的で自立したタイプばかりである。

諏訪の好みのタイプが、頭がよくて男に媚(こ)びない女性だということもあって、どうしても水商売の女たちには興味を抱けなかった。

しかし、先刻の青年の美貌に関しては、素直に美しいと感ずることができた。

「もちろん、本名は別にある。『アンジェ』ってのは、店での源氏名だよ」

元より本名とは思っていなかったが、店での源氏名と聞いて、意外な気持ちになっ

た。

「店というのは、ホストクラブか何かですか？」

とてもホストをしているようには見えなかったがと、諏訪は武藤と並んで事務所の中に戻りながら呟いた。

武藤は、その諏訪の呟きを聞いて、やはり少し困ったように「うーん」と唸(うな)った。「実は、うちの傘下にある『ロメオ』って、会員制の高級クラブがあるだろ。『アンジェ』は、その元ナンバーワンなんだよ」

辺りを憚(はばか)るような小声で囁(ささや)かれた事実、諏訪は思わず大きく目を瞠(みは)ってしまった。

それは、諏訪にとって、あまりにも衝撃的な事実だった。

佐多家組は、都内で多くの風俗店を経営している。

キャバクラやホストクラブは元より、性風俗店や特殊な会員制のクラブなども多数抱えていて、佐多家組の収入の半分以上を賄(まかな)っている。

その中でも、『ロメオ』という店は、少しばかり特殊なものだった。

「……『ロメオ』ってことは、ホストではなく男娼ってことですか……？」

諏訪が知る限り、『ロメオ』は派遣専門の会員制の高級クラブだったが、働いているのはすべて年若く美しい男ばかりのはずだった。

同じ佐多家組経営の高級コールガールクラブの『ジュリエット』と対になっていて、会員には政財界の大物が名を連ねている。

しかも、ホストクラブと違って会員は男性だけに限られていて、美貌だけではなく知性と品性をも併せ持った男娼たちが、ただの話し相手から、ベッドの相手までしてくれるということで、裏社会では評判の店だった。

よりもよって、あの美しい青年がその『ロメオ』の男娼、しかもナンバーワンだったというのかと、諏訪は普段冷静な彼には珍しいほど動揺しながらも武藤に確認した。

「ああ、そうだよ。まあ、今は若頭の専属だけどね」

先ほどの青年が古賀の専属だと知って、諏訪は眉を寄せて「まさか……」と呟いた。「もしかして、彼は若頭の愛人なんですか？」

本文 p39～45 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>